

「夜明けの物語」

小笠原
夕桔

かすかな車の走行音とクラクシオン。
サンダルとわかる靴音が、足早に近づいてくる。

段ボールの箱を、アスファルトの上に置く音。

みか「…ごめんね、パンダ。・・・さよなら」

逃げるように遠ざかっていく足音。

段ボールの蓋が擦れあう、ごそごそという物音。

パンダ「…さようなら。みかちゃん」

鼻水を吸る音。

パンダ「(涙声) わかってたんだ。遅かれ早かれ、みかちゃんと別れなきゃいけない日が来るんだって。…もし、みかちゃんのアパートのすぐ目の前がゴミステーションじゃなかったとしても…」

鼻水を吸る音。

パンダ「みかちゃんが彼氏さんと大喧嘩したのが今日じゃなくて明日の夜だったとしても、次の燃えないゴミの日まで少しだけ別れが先延ばしになってたってだけで…だから…だから全然悲しくなんか！」

パンダ、号泣する。

シャランと、かんざしの音。

藤娘「…(小声で) スノーボートちゃん。また、お仲間が一人増えたね」

チリンと、鈴の音。

スノーボート「(小声で) そうね、藤娘さん。

…ああ、あんなに泣いちゃって、かわいそうに。せつかくの毛皮がびしょびしょになってしまっわ」

藤娘「(優しく) …ねえ。新入りさん」

ガラスケースを叩く、コツコツという音。

パンダ「うわあああん！」

藤娘「(声を張り上げて) おや、まあ…。ねえ、ちよっと！パンダの、ぬいぐるみの、新入りさん！」

パンダ「…(泣き止んで) あ。は、はい」

藤娘「(笑って) やつとこっち向いてくれたね。気持ちはいよくわかるけど、そんなにわあわあ泣かないでくれよ。ここに集まっているものはみんな、あんたと同じ身の上さ。せいぜい楽しく過ごそうよ。せめて夜が明けるまでは、ね？」

パンダ「(鼻水を吸って) そうですね…。こ

こでみなさんとお会いできたのも、きつと何かのご縁でしょう。ご挨拶が遅れまじますが、僕、ぬいぐるみのパンダ、と申します。どうぞよろしく」

藤娘「パンダちゃんね。あたしは藤娘」

パンダ「藤娘さんとおっしゃるんですか？大変すてきなお着物ですね」

藤娘「(からかうように) あら、すてきなのは着物だけかい？」

シャラン、とかんざしの鳴る音。

パンダ「(あわてて) そんなことないです！

お顔もとってもお美しいです！ガラスケース越しでも眩しいぐらいですよ！」

藤娘「ふふつ、ありがとうね…ま、冗談はさておき。さっきからあんたの隣に立ってるお嬢さんが…」

スノーボート「あたしは櫛のスノーボート。

中国生まれの日本育ちよ。よろしくね」

パンダ「こちらこそ、どうぞよろしくお願ひします。つややかな青いボディがスタイリッシュですね！身につけてらっしゃるその銀色の鈴もステキだ」

スノーボート「スタイリッシュ？パンダさんって、面白い人ねー！」

くすくす笑う声と鈴の音。

藤娘「そして、そっちの電柱の影から、鼻の

先だけ覗いてる渋いお方が…」

パンダ「あ、もうお一方いらっしやっただんで
すか。これは大変失礼しました。…パン
ダです！どうぞよろしくお願いしま
す！」

熊「(低い声で)見てのとおり、木彫りの熊
だ。熊とでもなんとでも、好きに呼んで
くれ」

パンダ「まさしく、熊とパンダは遠い親戚も
同然…。(真面目な声で)お兄さんと呼
ばせていただいてもよろしいでしょう
か？」

熊「…変わった奴だな」

パンダ「ところで、北海道名物の木彫り熊と
いえば、お口にピチピチのサケをくわえ
ている勇ましい姿が定番ですよ。その
発音の明瞭さといい、今のところお口
は何もくわえてらっしやらないようで
すか、失礼ながらサケは…どうされたん
ですか？」

熊「(押し殺した低い声で)それを聞いてど
うしようって…？」

パンダ「(怯んで)い、いえ。単なる好奇心
で」

藤娘「(とりなすように)まあ、まあ。パン
ダちゃん、実はこの熊さんとあたしはね
ずうっと一つ屋根の下に暮らしてきた間
柄なんだよ。初対面じゃとっつきにくい
けど、誠実で情に厚い、いいオトコさ。
ね、みんな仲良くしようよ？」

熊「…(照れくさそうに)ああ。よろしく
な」

パンダ「こちらこそ、改めてよろしくお願
いします！」

車の走行音。

藤娘「ひととおりの挨拶も終わったところで…

さて、パンダちゃん」

パンダ「はい、なんですか？」

藤娘「さっきあんたをこのゴミステーション
に連れてきた娘さん。そのまんまどこか
へ行っちゃったようだけど、さ」

パンダ「(口ごもって)は、はい…」

藤娘「住まいは目と鼻の先なのに、こんな夜
中にワンピースに、サンダル履いて、手
には財布を握り締めてたつけ。…おかし
な話じゃないかい？」

パンダ「そ、それは…」

藤娘「だいたい、あたしたちはこうやって、
むき出しのまま地べたに置かれてるって
いうのに、パンダちゃんだけは段ボール
箱に入れてもらってる。きつと、そのき
れいな白黒の毛皮が汚れたりしないよう
に、つて気遣いだらうね」

スノーボード「愛を感じるわ…。なんか、深
い事情もありそうだけど…」

藤娘「ま、今夜この場所に顔を並べているつ
てこと自体、あたしたち全員訳ありって
いうか、スネに傷持つ身なんだけど、ね。

話してごらんよ。聞いてあげるからさ。
ね、熊さん？スノーボードちゃん？」

熊「ああ、話してみろ」

スノーボード「よかったら、話してみて？」

チリン、と鈴の音。

パンダ「…わかりました。お話します。でも
…、僕はスノーボードさんが身につけて
いる、その綺麗な銀色の鈴の話から、聞
きたいな」

スノーボード「えっ、私!？」

パンダ「…その鈴、たぶん、スノーボードさ
んの大切な人がつけてくれたものですよ
ね?そんな気がします」

スノーボード「(戸惑って)え、ええ…」

藤娘「(明るく)そうだね。…じゃあ、まず
はスノーボードちゃんの話から聞かせて
もらおうかしらね」

スノーボード「…皆さんにわざわざ聞いても
らうほど、面白い話でもないんだけど…
でも、そうね…。パンダさんの言うとお
りよ。(鈴の音)この鈴は、私の大切な
男の子、ゆうくんがくれたものなの…」

(場面転換の音楽)

スノーボードM「…私のゆうくんは、六歳に
なったばかりなの。二年前に。パパの転
勤で、広島から家族三人で引っ越してき

てね。

札幌で初めて迎える冬はものすごく寒かったけど、ゆうくんもパパもママも、雪なんてほとんど見たことがなかったから、見渡す限りの銀世界にとっても感動したんだって。

初雪が降った日曜日の朝に、ゆうくんがトナカイの橇に乗りたいたい！って言って。：ほら、アンデルセンの「雪の女王」って童話に出てくるでしょ？で、パパとママと三人で近所のホームセンターに買い物に来て：そこで、私と出会ったの」

スノーボードM「もちろん、ゆうくんの希望通りの橇なんて買えるわけがなかったけど、ゆうくんは私をとっても好きになってくれて、冬の間じゆうずうと仲良く遊んだわ。

この鈴はね、童話のトナカイの橇には鈴がついてたから、って、ゆうくんがパパにおねだりして買ってもらったものなの。ゆうくん一家が住んでいるマンションの近所の公園に小高い丘があつて、冬には子供たちがそこで雪遊びをするのよ。

丘の斜面を、ゆうくんを乗せて全速力で滑り降りたら、細かい雪の粒が全身に掛かって、すごく冷たいんだけど最高に気持ちいいの！」

小さい男の子のはしゃぐ声。

雪の積もった斜面を滑り降りる橇の音。
チリンチリンと響く鈴の音。

スノーボードM「：冬が終わるとスノーダンブさんや、冬タイヤさんや、パパが使ってるスノーボードさんたちと一緒に暗くて狭い物置に入らなきゃいけないって：。正直、あの人たちとはあんまり話も合わなくて、和気藹々って感じにはなれなかつたけど：来年の冬になればまたゆうくと遊べる。それを楽しみに待ってたのでも：」

扉を乱暴に開ける音。

スノーボードM「昨日の朝。まだ秋になったばかりなのに、私だけが物置から連れ出されたの。最初は何が起きたのか全然わからなかった。：ゆうくんのパパの手が私を乱暴に持ち上げた時に、パパの感情や記憶がはつきり伝わってきたわ。ママもゆうくんも、このマンションにはもういない。

ママがゆうくんを連れて出て行ったの。パパとママは、別れてしまったの」

(場面転換の音楽)

スノーボード「私の話はそれだけ。それで終わり。：一緒にいられたのはたったの一

冬だったけど、それでも：私は本当にゆうくんのことが好きだったわ。できればもう一度だけ、ゆうくんを乗せてあの丘を滑りたかったな：」

藤娘「夫婦別れっていうのは、本当に悲しいことだね。なんの罪もないお子さんが、いつだって一番つらい思いをするに決まってるつてのに」

パンダ「：藤娘さんと熊さんのいたご家庭は、どんなお家だったんですか？」

藤娘「：あたしたちがずっとお世話になってきたのはね、壁に蔦の絡んだ、古い古いお家さ。お年を召したご夫婦が、二人きりで仲むつまじく暮らしていらつしやつたんだよ。ね、熊さん」

熊「ああ。本当に仲のいいご夫婦だった」

藤娘「お庭の手入れもお散歩も、なんでも一緒になさってた。銀行にお勤めだった旦那さまは、これといった趣味も持たつらつしやらなかったし、お二人にはお子様もおいでにならなかったのね：」

パチ、パチと剪定ばさみを使う音。

静かに笑いあう、老夫婦の声。

藤娘M「お二人が丹精込めてお世話をしてらしたお庭は、それはそれは見事です。

春はツツジにライラック、夏は菖蒲に紫陽花に色とりどりの百合の花。秋は紅葉、冬は一面の雪景色。窓から眺める景

色はいっただって、額に入った絵を見てるみたいだったよ。奥さまの淹れたコーヒーを飲みながら、お庭の景色を眺める穏やかなひとときが、旦那さまはお好きだった。

奥さまが病がちになって、病院を出たり入ったりするようになってからも、暇を見てはお一人で心をこめてお世話なさいってたよ。大好きなお庭が荒れ果てているのをご覧になった奥さまが、悲しい思いをなさることなどないように、って」

コーヒーマーカーの湯が煮立つ、コポコポという音。

コーヒールをカップに注ぐ音。

藤娘M「…奥さまがお亡くなりになってからは、お一人で淹れたコーヒールをお飲みになりながら、よく物思いに耽ってらっしゃった。時々あたしに奥さまの名前で呼びかけたりなさってたわね。…出会った頃の奥さまの面影があると仰ってね。あたしの目を見つめながら、たくさん思い出話をしてくださった。

本当に君の手は昔から冷たかったね、って。両手で包んでも、息を吹きかけても、なかなか温まらなかった。

最後の最後まで手を握っていたけど、僕の手の温もりを移してやることは結局できなかつたね、なんて…。

その旦那さまもお亡くなりになって、ご親戚がたの話し合いもついて、あの古いお家も近々取り壊されることになってさ。家財道具や調度品も、値の張るものは貰い手が見つかったけど、あたしたちは…どなたも欲しいとは仰らなくてね。…で、ここへ辿り着いたというわけさ」

(場面転換の音楽)

パンダ「お二人は、…きつとすぐお幸せだったと思います」

藤娘「ふふ、そうだね。あたしもそう思ってるよ。…ああ、もうすぐ空の端っこの方から明るくなってくる頃だね。(明るい声で)…さ、パンダちゃん。いよいよ次はあなたの番だよ」

パンダ「…はい。じゃあ…聞いてください。僕と、僕のみかちゃんのこと」

静かに語り始めるパンダ。

パンダM「…僕は、みかちゃんが一歳になったお誕生日に、彼女の家にやってきました。みかちゃんのパパに連れられて。もう、二十四年も前のことだなんて信じられないなあ。つい昨日だったような気がします。…今とは違って、小さい頃のみかちゃんはすぐに熱を出す子で。お友達とあまり遊べないのが寂しかったんでし

よう。

そういう時は、よくベッドで僕にぎゅうって抱きついてました」

小さい女の子の鼻歌。

いとおしげに。パンダの名を呼ぶ女の子の声。

パンダM「みかちゃんは、僕にたくさんのお話をしてくれました。幼稚園の話。お友達の話。ママに叱られた時は、涙と鼻水でぐしょぐしょの顔を僕のお腹に埋めて、ママのバカー！なんて、ね」

女の子のしゃくりあげる声。

パンダM「次の日ぐらいに、僕を丁寧に手洗いしてくれるのもママだったりするんですけどね。

みかちゃんは、僕の世界のすべてでした。ぬいぐるみの僕に、生きる意味があるんだとしたら、それはすべてみかちゃんのためだった。…ぬいぐるみって、そういうものですよ？…どんどん大人になっていくみかちゃんは、僕がいなくても寝られるようになったけど、それでも何かつらいことがあった時は、ママにも秘密にしたいようなことでも、僕にはなんだって話してくれました。

彼氏さん…あ、しんやくんっていうん

ですけどね。しんやくんにプロポーズされた時も、僕に一番に打ち明けてくれたんです。目をキラッキラさせて…」

小さく「結婚進行曲」を奏でるオルゴールの電子音。

パンタM「あんなに身体が弱くて泣き虫だったみかちゃんが、秋には花嫁になるんです。きれいだろうなー…。僕には見ることができないのが、やっぱり少し残念なけど。」

最近のみかちゃんは、お仕事と結婚式の準備で忙しくて。イライラしてたんでしようね。話に聞くマリッジブルーってやつだと思います。さつき、しんやくんと、二人で暮らす新居に持っていく荷物について話していた時に、今まで見たことがないぐらいの大喧嘩しちゃいましたね…」

(回想シーン)

お茶を啜る音。

ソーサーにカップを置く音。

みか「…ね、どっちがいい？」
しんや「(欠伸して)ん？」
みか「ちよつと、…ちゃんと見てる？カタログ」

しんや「(眠そうに)引き出物なんて、どれ選んだって大して変わんないって。みかの友達が好きそうなやつでいいよ」

みか「(少し苛立った声で)もう、何でもみかが決める、みかの好きにしろつて。しんやも少しは考えてよ」

しんや「あのなあ…。俺、ここ一週間、九時とか十時まで残業してんの。後輩が急に辞めちゃって、バタバタしてるつて話、したよな？」

みか「忙しいのは私だって同じだよ！」

しんや「あー、わかったわかった。じゃ、貸して。カタログ」

みか「…はい」

しんや「…と、うわ！」

みか「あ！」

ティーカップがひっくり返り、茶がテーブルにぶちまけられる音。

しんや「あ…、ごめん」

みか「もー、パンダちゃんが！ごめんね、パンダちゃん、今拭いてあげるね」

しんや「おーい、俺の服も結構びしょびしょなんだけど…」

みか「…はい。タオルっ」

しんや「投げて寄越すことねーじゃ…」

みか「よかったー。紅茶だからシミになるかと思っただけど、あんまり濡れなかったね」

しんや「(不満そうに)ふーん…。ま、もしシミになるようなら、新しいの買ったつていいし」

みか「…今度のアパート、結構狭いでしょ。大きいぬいぐるみは、パンダちゃんだけでいいよ」

しんや「いや、そいつ捨ててさ。新しいの買えば？新居に似合うような、新品のやつ」

みか「…ひどい」

しんや「え？」

みか「パンダちゃんを捨てるなんて！この子とは、ずっと一緒にいたのに！(涙声で)」

小さい頃から、ずっと…」

しんや「ちよつと、泣くなよ、大げさだなあ。冗談だった」

みか「大げさなんかじゃないよ！しんやはなんにもわかってない！」

しんや「…なんなんだよもう！わけわかんねえな！」

(回想シーン終わり)

パンタM「しんやくんにだって、悪気はなかったんだと思います。あの人から見たら、ゴミ同然の古ぼけたぬいぐるみですからね。それに、みかちゃんは頑固だけど、たったそれだけの価値観の違いであんなに怒ったりする子じゃありません。だから僕、二人のやり取りを聞いていて思い

ました。：ああ、この子もずーっと、いつかは僕と別れなきやいけな、でなきや大人になれないって、心のどこかで思ってたんだ、って。

本当は僕も同じ気持ちだったから、わかったんです」

『結婚行進曲』を奏でるオルゴールの音。

パンダM「しんやくんが帰ってしまったから、みかちゃんは僕のおなかに顔を埋めて、しばらく泣いてました。小さい頃と同じように。：やっとみかちゃんが顔を上げて、泣き腫らした目を見せてくれた時。

：僕、心の中でみかちゃんに言いました。君が本当に大人になれるんなら、僕を捨てていいんだよ、って。みかちゃんは、涙をこぼしながらうなずいた気がしました」

(場面転換の音楽)

藤娘「つまり、こういうこと？あんたが今ここにいるのは…」

パンタ「ええ。しんやくんに言われたからじやありません。：みかちゃん自身の意思です」

スノーボート「：そうだったの。とってもちがかったでしょうね。お互いに…」
パンダ「いえいえ、そんな…。ひとつだけ気

がかりなのは、しんやくんが、泣いて怒ってるみかちゃんを置いて帰ってしまったこと。：こんな時こそ、あの子のそばにいてあげなきやいけないのにな」

藤娘「：あたしは、しんやさんというお方は、本当はちよっぴりパンダちゃんに嫉妬していたような気もするんだけどねえ。：みかちゃんがパンダちゃんをゴミに出したと聞いたなら、自分のせいだと思っちゃまうんじゃないのかしら。：ねえ、熊さん？」

熊「：話の腰を折るようで申し訳ないが、ちよつと静かにしてもらえるか？」

藤娘「(声を潜めて) どうしたんだい？」

熊「足音が聞こえる。こっちに向かって歩いてくる足音が二つ。三つ…」

熊が鼻を動かし、空気の匂いを嗅ぐ音。

熊「：なるほど、な。ゴミ収集車がやってくるまでにはまだ間がある。試してみるだけの価値はあるな」

藤娘「そうだね。：時間はまだあるものね」
スノーボート「(せかすように) 熊さん、なるほどってどういうこと？足音って？」

チリン、と鈴の音。

熊「その鈴…。使えそうだな。：スノーボートさん」

スノーボート「はいっ？」

熊「思いついたことがあるんだが、俺の言うとおりにしてもらえるか。できるかぎり体を揺すって、鈴を鳴らしてみてくれ」
スノーボート「こう…かしら」

チリンチリン、と住宅街に響く鈴音。

熊「よし、それでいい。：ああ、鈴の音に気づいてくれたようだな。：走り出した」

藤娘「もしかして…みかちゃん？」

熊「いや、その子はまだ…(はつとして) おい、みんな！気をつける！」

近づいてくる、バタバタという足音。

荒い鼻息。

パンダ「うわあああ！」

スノーボート「きゃあ…！」

藤娘「パンダちゃん！」

グルグル、という犬の呻り声。

主婦「ダメでしょ！ゴミなんか拾っちゃ！ほら、ポイして！」

アスファルトに柔らかいものが落ちる音。
犬が鼻を鳴らす甘えた声。

主婦「まったく、もう。あら？この櫛、どこ

も壊れてないわね。なんで捨てたのかしら？」

犬の鼻声。

主婦「ほーら、いい櫛でしょ、ハナちゃん。気に入った？」

嬉しげに応える犬の吠え声。

主婦「(囁くように) まだこんなに綺麗なのに、捨てられちゃったのね。…よし、あんた！家に来なさい！家には三歳の可愛い孫がいるの。櫛滑りとか、お買い物とか：冬になったら、たっくさん働いてもらうからね！」

櫛が持ち上げられ、鈴の音が鳴る。

主婦「あら、鈴がついてる。…いい音ねえ」

主婦、ふふっと笑う。

主婦「さ、帰りましょ」

遠ざかっていく一人と一匹の足音。

スノーボード「パンダさーん！藤娘さーん！熊さーん！」

パンダ「僕なら大丈夫ですー！ちよっぴり鋭

い菌型がついたぐらいで！」

藤娘「スノーボードちゃん！貰い手がついてよかったねー！もう一花咲かすんだよ！」

熊「幸せにな…」

スノーボード「皆さーん、さようならー！」

スノーボードの声、遠くなっていく。

パンダ「やれやれ、ひどい目にあった…でも、よかったですね。スノーボードさん」

ゆっくり近づいてくる重々しい足音。

藤娘「…また、誰か来た！」

パンダ「あつ、しんやくん！…うわっ！ちよっ、乱暴だなあ！」

パンダの体から埃を払い落とす音。

しんや「あーあ、お前も災難だったな…。…なあ、みかがどこ行ったか知ってるか？携帯も切っちゃってるし、いつものファミレスにもいなくてさ…。(笑って)あいつも頑固な奴だから、お互い苦労しそうだけど…改めてよろしくな！」

パンダ「(感極まったように) しんやくん…」

軽やかに響くサンダルの音。

みか「(息を切らせて) …しんや！」

しんや「…まったく、こんな時間に何やってんだよお前は…。…ほら」

みか「…よかった、まだ誰にも拾われてなくて…。(涙声で) ごめん…ごめんね」

パンダ「(小声で) みかちゃん…」

藤娘「(小声で) このお方がしんやさん？男前じゃないの。なかなかお似合いの二人だねえ」

パンダ「…みかちゃん。目が真っ赤だ…」

藤娘「ふふ、これで丸く収まりそうだね。パンダちゃん」

熊「…雨降って地固まるというやつだ。よかったな」

パンダ「…(涙声で) 藤娘さん。熊さん」

藤娘「さよなら。幸せにね」

熊「元気でな。…兄弟」

パンダ「…さようなら」

パンダの声、遠ざかっていく。

藤娘「(笑いを含んだ声で) 最初っから最後まで泣いてたよ。本当に泣き虫な子だったねえ。…ああ、手を振ってる。みかちゃんの腕にしっかりと抱かれて。…ああ、本当によかった」

雀のさえずり。

藤娘「熊さんが鈴の音で犬を呼び寄せてくれたおかげで、スノーボードちゃんにも新しい道が開けたし。…ふふ、とうとう、あたしと熊さん二人きりになっちゃったね」

熊「…あなたも」

藤娘「えっ？」

熊「あなたもそのうちに、通りかかると誰かが家に連れて帰りたいと思うはずですよ」

藤娘「ふふっ、だいたいいいけど」

熊「きつと、そうなる。朝の光の中で、こんなに…き、綺麗な人をゴミと間違えるはずがない」

藤娘「お世辞でも嬉しいよ。ありがとうね」

熊「お世辞じゃありませんよ。自分は…ペラペラお世辞が言えるようになったんじゃない」

藤娘「熊さん…」

熊「これといつて趣味のなかった旦那さんが、奥さんのすすめでノミを取って、時間を掛けて俺を彫り上げてくれた。もう少しで完成ってところで、うっかりサケの尾っぽを切り落としちゃって、完成したのはサケをくわえていないヒグマ、ってオチだったけど…。俺は、運命ってやつに感謝したい気持ちだ。木彫り熊につきもののサケがないおかげで、口をきくこともできるし、その…こうして最後にあなたと二人つきりに、なれた」

藤娘「…無口だと思ってたけど、本当はこんなに喋りなお方だったんだね」

熊「(少しうろたえて) いや、まあ…」

藤娘「…だけど、もしもあたしだけがどなたかの目に留まるようなことがあつたって、あたしは…あなたと離れ離れになりたくない」

熊「それはどうして…」

藤娘「ずっと好きでしたよ。…初めてお姿をお見かけした時から、ずっと」

熊「本当ですか？あなたみたいな高嶺の花が、その、俺なんかを…」

藤娘「(笑いを含んだ声で) 高嶺の花は恋をしちゃいけないだって、いったい誰が言ったんだい？」

熊、唸り声をあげて黙り込む。

軽やかな自転車の走行音とベルが響く。

藤娘「…ああ、もうすぐ朝が来てしまう。

あたしね、本当はこわくてこわくてしかたなかった。仲のよかったマトリョーシカさんやこけしさんたちが、別れの挨拶もそこそこにどこかへ連れていかれちゃって、二度と戻ってこなかった時から…。次はあたしの番なんだろうか、ゴミに出されたらあたし、どうなっちゃうんだろうかって、そればかり考えてた。…でね」

車の走行音。靴音。朝の活気に満ちた物音が遠くから近づいてくる。

藤娘「生まれた工房と、お店。育った家の中しか知らなかったあたしが、今こうして世界の端っこをこの目で見てる。朝焼けがこんなに綺麗なものだなんて、思いもしなかった。ちっぽけな人形のあたしなんかには想像すらできないほど、世界って広いんだね。

ゴミ処理場送りはやっぱりこわいけど、世界はこんなに大きくて綺麗なところなんだって、最後に知ることができて…良かったよ」

熊「…俺も、同じ気持ちです」

藤娘「じゃ、あとは仲良く思い出話に花を咲かせようか。…ああ、本当に綺麗な空だね…」

車のクラクション、エンジン音。

先ほどまでより大きく響く靴音。活気に満ちた朝の街のざわめき。

(了)